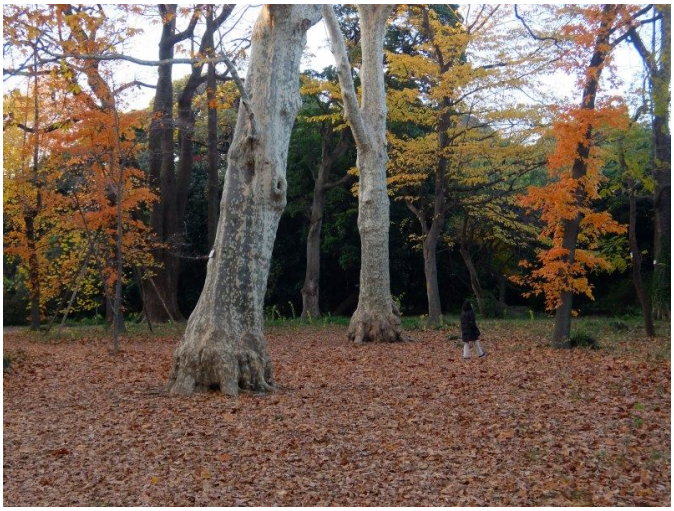
「日々の理科」（第 1259 号） 2017（H29）, 12, 17

「晩秋の小石川植物園（６）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

このスズカケの木は本当にすばらしい。かつて私はこの森に何度も子どもたちを連れてきた。子どもたちは誰もがこの不思議な樹皮の木に心ひかれ、木に触って、耳を寄せて、木の鼓動を聞こうとする。それから木のまわりで手をつないで、胴周りの長さを測ろうとする。しかしあまりにも太く、樹皮が滑らかなので、この木に登ることは難しい。



木の根元に人物が写っている。人物と比較すると、いかに巨木かわかるだろう。国内のプラタナスでこれほどの巨木は珍しいと思う。

冬至に近いこの日は、午後３時を過ぎると、地面には太陽光が当たらなくなった。急に寒くなってくる。バッグに入っていた「ホット午後の紅茶」を飲んで暖をとり、私は大急ぎで２枚の絵を仕上げた。１枚およそ 20 分。描き終わると午後４時近くになっていた。

森の絵は難しい。漢字と同じで、風景にも「描く順番」というものがある。下絵（鉛筆の線描）は近くのものから、着彩（水彩）は遠くから描くのが基本だ。滲みを防止するため、「隣り合った領域」は続けて塗らないほうが良い。絵を現地で描き終えることを「現地主義」という。忙しいとなかなかできない。しかし、時々こうして自然と対峙しながら、思いを絵にするのも新鮮な体験だと思う。

描き終わったあと、スズカケの木の下に立ってみた。木の形（樹容）というものは、遠くの真横から見ないとわからない。しかしこうして樹冠に残照を浴びた巨木を見上げているうちに、「木はなぜ存在するのだろう」という問いが、ふと頭に浮かんできた。